みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：ストリートが紡ぎ出す力：ハビトゥスとブリコラージュ：都市ストリートの知と暴力のスタイル：創発的共同性に向けて：ストリートで意味を生産する：アビジャンにおけるストリート文化の記号論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001239

関根康正編『ストリートの人類学』上巻
国立民族学博物館調査報告　80：327−347（2009）

都市ストリートの知と暴力のスタイル
——創発的共同性に向けて

ストリートで意味を生産する
アビジャンにおけるストリート文化の記号論

鈴木　裕之
国士舘大学

本論文では，コート・ジヴォワール共和国の大都市アビジャンで生成するストリート文化についての記号論的分析を試みる。ストリートという閉じられたコミュニケーション空間において，ストリート・ボーイたちは独自の意味世界を生きている。ストリートの現実はスラングによって分節化され，意味づけられ，体系づけられてゆくが，その様態を人間分類と空間認識について具体的に考察する。そしてそのプロセスの中で形成される独自の価値体系と，その価値観に沿った具体的な行為との関係を，ラングとパロールの概念を援用して分析する。さらに，アビジャンのストリート文化がマスメディアから取りいれた要素で溢れている状況に注目しながら，ブリコラージュの概念を用いて，ストリートで意味が生産されるメカニズムについての考察を試みながら，ストリート文化がストリート・ボーイたちの知的活動の所産であることを示す。

1　はじめに
2　ストリートの言語実践——スラング
3　自己認識——私は誰？
4　空間認識——ここは何処？
5　ストリートの価値世界——イェレとガワ
6　意味生産の方法——ブリコラージュ

キーワード：アビジャン，ストリート，スラング，ブリコラージュ

1　はじめに

レヴィ＝ストロースは，アマゾンにおけるシャーマンの治療について論じた論文の中で，その治療の象徴的効果について「シャーマンは，その患者にいい表されず，またほかにいい表しようのない諸状態が，それによって直ちに表されることができるような言葉をあたえるのである。そして，生理過程の解放，すなわち患者がその進行に悩んでいた一連の過程の好ましい方向への再組織をひき起こすのは，この言語表現への移行である」（レヴィ＝ストロース 1972: 218）と論じている。つまりシャーマンは，「無秩序で言

葉に表現しようのないもの」である経験を，言語表現により「秩序ある可知的な形式」へと移行させるというのだ。このプロセスはアビジャンにおけるストリート文化の生成過程を解釈する際の枠組みを提供してくれる。

筆者はこれまで，コート・ジヴォワール共和国の大都市アビジャンに居住するストリート・ボーイの社会学的生態と彼らのつくりだすストリート文化の諸相について，さまざまな論文で報告してきた（鈴木 1992, 1995, 1996, 2000, 2001a, 2001b, 2005a, 2005b, 2005c, 2006a, 2006b; Suzuki 1997, 2001）。本論文はそれらを踏まえた上で，アビジャンのストリートにおいていかに意味が生産されているかを記号論的に分析するものであるが，本論にはいる前に，ここでアビジャンのストリート文化の概要を整理しておこう。

① コート・ジヴォワール共和国最大の都市アビジャン（1988 年センサス：人口約 193 万人／国内人口約 1,080 万人）には〈ヌゥシ〉と総称されるストリート・ボーイがいる。
② 彼らのほとんどは小・中学校を中退し，ストリートに経済活動の場を求めた 10 代半ばから 20 代半ばくらいまでの少年で，さまざまなインフォーマルな雑業，あるいは犯罪に従事する。
③ 彼らにとって経済活動の場であるアビジャンのストリートは同時にコミュニケーションの場であり，そこにおいてたがいにさまざまなコミュニケーション活動を繰りひろげてゆく。
④ その過程で彼ら独自のコミュニケーション様式が形成され，それがアビジャンの人々からストリート文化として認識されてゆく。その内容は，言語活動（スラング）および身体活動（身振り，ダンス，服飾）である。
⑤ このストリート文化は若者に人気のあるポピュラー音楽（レゲエ，ラップ）と結びつくことでマス・コミュニケーション過程に取りいれられ，ストリートというコミュニケーション空間を越境するようになった。

さて，文化人類学者である私は，学問的な約束事にしたがってフィールドワークをおこない[1]，ストリートのスラングを学習し，ストリート・ボーイたちと行動を共にし，ストリートの現実を経験し，観察し，その様態を考察し，記述し，論文として，本としてまとめてきた。考えてみると，このプロセスは現実の経験を言語により可知的な形式に移行させるというシャーマン的治療のそれと同じではないだろうか。私がアビジャンのストリートで巻きこまれた現実は，個別的であり，無秩序であり，捕らえどころがないもののように思えた。異文化を文化人類学の視点から分析し，記述するという使命を負っていた私は，自分が経験した現実を分節化し，類型化し，各要素を関連づけ，そこにある種のパターンを見いだし，それらを秩序ある言語表現で記述することによって，

アビジャンのストリートで体験したことを可知的な形式として提示してきた。その結果，ストリートで経験された「状況」はストリート「文化」となり，その全体像を上記のごとく①から⑤まで箇条書きで説明できるまでになったのである。だがそのことの妥当性を批判的に検討するのがここでの目的ではない。そうした検討の必要性を自覚しつつも，本論文ではこれまでの研究の成果を利用しながら，さらに先に進みたいと思う。

ここで問題にしたいのは，アマゾンのシャーマンが実践し，文化人類学者である私がおこなってきたこと，つまり，「状況」から「言語表現」への移行，という実践を，アビジャンのストリート・ボーイたちもおこなっているのではないか，ということである。言語活動は身体活動とともにアビジャンのストリート文化を構成する中心的な要素である。アビジャンのストリート・ボーイの属性としてスラングの使用を挙げることができるが，逆の言い方をすればスラングを喋るのがストリート・ボーイであり，さらに正確を期した表現をすれば，アビジャンにおいて人はスラングを喋ることでストリート・ボーイになるのである。たしかにある少年が学校を中退させられ，家庭からの経済的保証を得られなくなったときにストリートが経済活動の場として立ち現れ，彼はそこで活動することによってストリート・ボーイとなる。ストリート・ボーイ誕生の個別的な物語はつねに経済関係からはじまるのだ。しかしその先に広がるのは，たんなる経済的実践のプロセスではなく，むしろさまざまな意味に満たされたストリート世界で展開される象徴的実践のプロセスなのである。

アビジャンのストリートは意味で充満している。その意味を担うのは聴覚的および視覚的なさまざまな記号であり象徴表現である。ことば，音楽，服装，身振り手振り，ダンス……これらアビジャンのストリート文化の構成要素の意味を理解し，ストリートという象徴的世界を「正しく」生きること，これこそがアビジャンにおいてストリート・ボーイで「いる」ということにほかならない。であるから，日本からきた大学院博士課程（当時）の私でも，ストリートのスラングを習得し，ストリート・ボーイの行動様式を真似ることによって，部分的にせよ彼らの仲間として認知されるようになったのである。

ヘブディジは「サブカルチャーのスタイルには意味がいっぱいに含まれている」と指摘した後で，「スタイルのつややかな表面にコードで刻み込まれた秘密のメッセージを識別し，それらを〈意味の地図〉として描き出さなければならない」と述べている（ヘブディジ 1986: 35）。この文は研究者による対象のコード読解および記述について語っているが，本論文で私が描き出すのはアビジャンのストリートにおける意味の地図だけでなく，それをアビジャンのストリート・ボーイたちがどのように造りあげているのか，つまり意味の地図の「作成法」である。彼らの言語実践がいかにしてストリート独自の意味を生産し，価値観を形成してきたかをあきらかにするのが本論文の目的である。

2 ストリートの言語実践——スラング

コート・ジヴォワールの公用語はフランス語である。アフリカでは北アフリカ諸国（アラビア語）やタンザニア（スワヒリ語）などの一部をのぞき，ほとんどの国が旧植民地宗主国の言語を公用語として採用している。多民族国家においては，特定民族の言語に特権的地位を与えることは政治的葛藤を引きおこす。多くの国家が，国境線と公用語を植民地時代の遺産として引き継いだのである。

フランスの植民地政策の基本は直接統治・同化主義であったが，その際，フランス語を話す民族を「フランス人」と想定する政策が採られ，フランス語普及・教育により「フランス人」を創出することを目的とする言語同化主義が推し進められていった（三浦・糟谷 2000: 132–133）。植民地には原住民学校が開校され，「原住民」にフランス語教育が施されていったが，じっさいに学校でフランス語教育を受けたのは首長の子弟などをはじめとする少数のエリートたちで，彼らが宗主国の支配に忠実な通訳や下級官吏となっていった。こうした中から高等教育を受け，近代的思考を身につけ，政治家となり，やがて反植民地運動に身を投じたアフリカ独立運動の闘士たちが誕生するのであるが（コート・ジヴォワールの独立の父ウフエ・ボワニ初代大統領はその中心的人物であった），それはフランス語教育のもたらした逆説的結末で，基本的にはフランス語は現地人を支配し同化させるための道具として活用されたのである。

1960 年 8 月 7 日に独立したコート・ジヴォワール共和国は，多民族国家であるという現実的理由から公用語をフランス語に定めたのであるが，それはフランス語による言語ヘゲモニーを継承・発展させるということも意味した。ウフエ・ボワニは，隣国ガーナのンクルマやギニアのセク・トゥレが急進的な反西洋主義を打ちだしたのとは対照的に親西洋路線を採り，言語のみならず政治・経済の分野においてもフランスとの結びつきを深めていった。学校教育は一貫してフランス語でおこなわれ，行政をはじめとする公共の場ではフランス語が使用され，マス・メディアは国営テレビ・ラジオでいくつかの民族語による短いニュース枠がある以外は，新聞・雑誌も含めすべてフランス語が使用される。コート・ジヴォワールにおいてフランス語習得は社会的エリートとなるための必要条件なのだ。またアビジャンでは日常生活のレベルにまでフランス語が浸透しており，近隣の仏語圏アフリカ諸国の都市と比べても，たとえばダカールではウォロフ語が，バマコではバンバラ語が広く普及しているのに対し，アビジャンではフランス語を日常語としている家庭やフランス語しか理解できない子供を数多く目にすることができる。だがアビジャンの住民すべてがいわゆる標準フランス語を話せるわけではない。

三浦は，「フランス語が規範性が強い言語であり，その表象が伝統的にエリート主義的」であり，「宮廷の，パリの，上流の，知的なフランス語話者が田舎の，下層の，植民地の，規範から外れた周辺のフランス語（「パトワ」，「プチネーグル」，ケベックの

「ジュアル」）を笑い者にする心性は，言語普及の障害にしかならない」と述べているが（三浦・糟谷 2000: 127），フランス語普及率が高いアビジャンにおいて，正式な学校教育を受けていない話者たちは「規範から外れた周辺のフランス語」をつくりだすことによってこの言語的状況に適応していった。名詞の性を無視し，冠詞を省略し，動詞の活用を簡略化し，民族語から語彙を借用し，民族語の慣用句をフランス語に直訳して使用していくうちに，アビジャンにおける民衆フランス語が形成されていった。それはクレオールほど独立性の高い言語体系ではなく，アビジャンの日常生活の中で必要に応じてつくりだされた個別的な表現の流動的な集積といったものであるが，話者のあいだに共通了解を成り立たせるだけの意味伝達機能は備えており，民族を超えたコミュニケーション・ツールとして普及している。この言語は文字化されることはほとんどないが，かつて週刊誌『イヴォワール・ディマンシュ』に民衆フランス語による時事批評が掲載され，その語り手がムサ（マンデ系の男子の名）と名のっていたため，「ムサ・フランス語 français de Moussa」と呼ばれるようになった（以下，本稿では民衆フランス語をムサ・フランス語と表記する）。

もちろん，アビジャンで民族語が使用されていることは言うまでもない。コート・ジヴォワール国内には約 60 の民族が存在するが（原口 1996: 19–22），アビジャンではそれに加えて近隣アフリカ諸国から複数の民族を含む移民が流入しており，人口の約 36 パーセント（1988 年時）を占めるにいたっている。いくらフランス語が普及しているといっても，民族語で日常会話をする家族の方が圧倒的に多いであろう。だが同時に，アフリカの都市部では多言語使用があたりまえとなっており，アビジャンでもひとつ，あるいは複数の民族語とフランス語やムサ・フランス語を併用する者が多いのである。またマンデ系のジュラ語は超民族的な商業言語として市場などを中心に普及しており，フランス語を喋れなくとも民族語とジュラ語を併用する商人の数は多い。

以上のようにアビジャンの言語地図は，支配者側から強制された公用語のフランス語，それに対する民衆の反作用として発達したインフォーマルなムサ・フランス語，アフリカの伝統的文脈の中で形成されてきた民族語およびジュラ語，という 3 つの要素から成り立っている。では，ストリートのスラングはどのように位置づけられるであろうか。アビジャンにおいて，ストリートのスラングは「ヌゥシ」と呼ばれる（その語源については，次節で説明する）。ヌゥシはストリートにおける言語実践から生成される話しことばで，フランス語を変形させることで形成されるさまざまな言語表現の集積である[2)]。

ここで「スラング」という用語について整理してみよう。これは英語 slang のカナ表記であるが，フランス語でこの概念に対応する語彙は argot および jargon の 2 語である。フランスの社会言語学者ルイ＝ジャン・カルヴェによると，「jargon と argot は（歴史的に）相継いで同じものを意味してきたが，今日ではそれぞれ異なる意味を担っており，ロベール辞典によると，argot は〈悪人の言語，やくざ言葉〉，jargon は〈理解不能な言語〉

あるいは〈あるグループに特有の言語で，その複雑さ，ある種の語や言いまわしの使用により特徴づけられる〉」。しかし「この区別にはなんら科学性はなく，実際の使用においては，辞典に載っている定義によって両者を区別するのは容易ではない」（Calve 1994: 5）。argot と jargon の意味の重なりあいは大きく，話者も意味の違いを明確に意識しないで使用することが多い[3]。アビジャンにおいても，ストリートのスラングを話題にした学者やジャーナリストの言説において，両者はあまり区別せずに使用されている。

フランス語の語彙の問題はさておき，重要なのは argot と jargon の辞典上の意味が，ヌゥシの性格を明確に説明していることである。ストリート・ボーイという「悪人」に「特有」の言語で，独特の「語や言いまわし」を多用した「複雑」で「理解不能」な言葉。ストリートの外側から眺めたなら，ヌゥシはまさにこのように定義されるだろう。ストリートにおけるコミュニケーションは基本的にヌゥシによっておこなわれるが，このスラングがストリート・ボーイ以外には理解不能なため，ストリートは外界と断絶した閉鎖的な言語コミュニケーション空間をつくりだすこととなる。この自主的な「断絶」こそ，スラングのもっとも大きな特徴であろう。ではなぜ断絶するのか。

アビジャンのストリート・ボーイのほとんどは，家庭の経済的事情などから小・中学校を中退した少年である。先述したように，学校教育は一貫してフランス語でおこなわれるが，その先には行政機関，民間企業などの形をとった近代システムが広がっている。すなわちフランス語による学校教育は「近代」にアクセスするための回路なのである。一方，学校を中退した息子には明るい将来を見込めないのであるから，家庭においても疎んじられることとなり，食費も含めて「自分の金は自分で稼げ」ということになる。アビジャンにおいて居住を同じくする世帯および親族の紐帯でつながった拡大家族は，各家庭の経済状況に対応した近代化の程度（生活様式が西洋化されているか，フランス語で会話するか，など）はさまざまであれ，イデオロギー的には民族的な「伝統」と自己を結びつける場である。学校と家庭の双方から拒絶されるとは，近代システムおよび伝統システムへの回路に接続する術を失うということである。もちろん携帯電話やテレビ・ゲームなどの近代的物質文明に浴したり，何らかの手段で欧米に移住することは可能だし，家庭内でも面と向かってあからさまに拒絶されることは少ないだろう。だが学校を中退した少年が，近代および伝統システムの中で期待されるような「正規品」でなくなったのは確かである[4]。

彼らにとってストリートは金を稼ぐ経済的フィールドであると同時に，コミュニケーションを実践する社会的フィールドである。ストリートで具体的に経済行為を実践するにあたってはストリート・ボーイのあいだでの言語コミュニケーションが必要であり，彼らの経済的言語コミュニケーションの実践の中からスラングが生成されていった可能性は高い（職業語としてのテクニカル・タームが発達しているのはヌゥシの特徴である）。だが世間，つまりストリート〈外〉の世界から「ワル」として敵視され，治安維

持の名目で警察の取り締まりの対象になりやすいという事情から，彼らは部外者に理解不能な言語活動をおこなうことで閉じた言語コミュニケーションの環をつくりだしたのであろう。その際，彼らに正規のフランス語会話能力が欠如しており，同時に多民族で構成されるストリート世界に共通語となる民族語が不在であったことが，さまざまな語や言いまわしの集積であるヌゥシの複雑化を助長したと考えられる。こうして世間から拒絶された者が，拒絶される客体の身に甘んずることなく，逆に主体として世間を拒絶するというプロセスの中で，ヌゥシが生みだされていったのである。ここに，フランス語を頂点とする言語ヘゲモニーへの抵抗というイデオロギー的側面を見ることも可能であろう。

こうして生まれたヌゥシはストリート・ボーイたちの第一言語となり，経済活動にリンクしたテクニカルな側面だけでなく，ストリート・ライフ全般にわたる叙述能力を発達させていった。彼らはヌゥシによって現実を解釈し，ヌゥシによって名づけ，ヌゥシによって了解する。つまりアビジャンのストリート・ボーイたちは，ストリートの「状況」をヌゥシという「言語表現」によって「可知的な形式」へと移行させていったのである。彼らはヌゥシによって「意味の地図」を作成し，その意味世界を生きているのだ。

これ以降，アビジャンのストリート・ボーイたちがヌゥシによってどのような意味を生産しているかについて述べてゆくが，その際に彼らによる自己認識，空間認識，さらにストリートの価値観の問題を取りあげてゆく。

3　自己認識――私は誰？

物事の意味は，それを眺める際に依って立つ視点に応じて変化するものであるから，まずは自己のアイデンティティの問題について明らかにする必要がある。

ホールが述べるように，アイデンティティは「決して統一されたものではなく，……次第に断片化され，分割されているもの」であり，「単数ではなく，さまざまで，しばしば交差していて，対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」ものであり，「たえず変化・変形のプロセスのなかにある」（ホール／ドゥ・ゲイ 2001: 12）。主体は単層的でなく，その内部に複数の要素を抱えた複合的なものであり，ひとつに固定されうるものではない。たとえば，彼はアフリカ人であり，黒人であり，コート・ジヴォワール人であり，男であり，何々族であり，キリスト教徒あるいはイスラム教徒であり，何とかというサッカー・チームのファンであり，そしてストリート・ボーイである。これらすべてが交差する場が彼の主体であり，主体を取りまく社会的状況に応じて異なるアイデンティティが構成されるのである。ではストリート・ボーイとしてのアイデンティティはどのように構成されてゆくのであろうか。

アビジャンでストリート・ボーイは brigand「悪たれ」，bandit「悪党」，vagabond「浮

浪者」など，日本語の「ワル」のニュアンスを持つフランス語で呼ばれることが多いが，ストリート〈外〉の人々がストリート・ボーイを一括したカテゴリーで指示する時には〈ヌゥシ〉（フランス語表記で nouchi）が使用される。スラングは，〈ヌゥシ〉が使用する言語という意味で，そのまま「ヌゥシ」と呼ばれているのである（以下本稿では，ストリート・ボーイに対する呼称を〈ヌゥシ〉，スラングはそのままヌゥシと表記する）。ヌゥシはジュラ語で「口ひげ」を意味する。では，どのような経緯でストリート・ボーイが「口ひげ」と呼ばれるようになったのだろうか。

1960 年に独立したコート・ジヴォワールは，主要輸出産品であるコーヒー・カカオの好景気を背景に 1960 年代から高度経済成長を達成した。だがモノカルチュア経済に頼る経済体制の中で 1970 年代には徐々に景気が失速しはじめ，失業，犯罪増加など社会的矛盾が目立つようになる。そんな中，学校を中退させられる子供が増え，彼らの多くがストリート・ボーイとなっていった。彼らはストリートで経済活動を営むと同時に，当時もっとも人気のあった娯楽施設である映画館に群がった。おなじ時期，香港産の空手映画の配給がはじまった。コート・ジヴォワールで最初の空手映画「ミス柔道家対 5 人の空手兄弟 Miss Judoka contre les cinq frères Karaté」が上映されたのは 1971 年のこと。その後，一連のブルース・リー主演映画により空手映画ブームが訪れた。正義の味方である主人公が悪漢相手に復讐を果たす，というパターン化した空手映画を視聴するうちに，ストリート・ボーイたちは悪漢のほとんどが口ひげをたくわえていることに気づいた。やがて彼らは映画に登場する悪漢をジュラ語で「ヌゥシ」（口ひげ）と呼ぶようになった[5]。

映画館にたむろするストリート・ボーイの一部は凶悪化し，映画を見に来た客をナイフで恐喝したり，チケット売り場を占拠して正規の値段より高い入場料を強制的に徴収してその差額をポケットに入れるといった行為を働くようになっていった。彼らは映画館をたまり場とし，家に帰らずに映画館の軒先や屋内で眠ることも多く，不潔な格好が目立った。やがてストリート・ボーイのあいだで，彼らを空手映画の悪漢になぞらえて〈ヌゥシ〉と呼ぶようになった。この呼称がストリート〈外〉にも広がり，ストリート・ボーイ全体を指し示すことになるのだが，ストリートの実態を知らない人々にとってストリート・ボーイはみな一様に危険な存在と見なされるため，映画館にたむろする〈ヌゥシ〉たちの体現するネガティヴなイメージがストリート・ボーイ全体へと適用され，それが名づけという行為となって具体化したのであろう。つまり〈ヌゥシ〉とは，ストリート〈内〉ではある特定の行動様式を持った悪質なストリート・ボーイを指すが，ストリート〈外〉ではストリート・ボーイ全体へのラベリングとして使用されているのである。個別的な事情で学校を退学し，個別的な状況の中でストリートの経済関係に入っていった個々の少年たちは，人々から〈ヌゥシ〉という呼称で囲いこまれることによってストリート・ボーイとしての自覚を明確に持つことになる。つまり，他称として

の〈ヌゥシ〉が組みこまれた人々の言説との相互作用によってストリート・ボーイとしてのアイデンティティが形成されてゆくのである。だがストリートにおいて，〈ヌゥシ〉はあくまでも全体の一部を指すにすぎない。ストリートにはさまざまなタイプの人間が存在するのである。

外側から眺めると一様に「ワル」く見えるストリートであるが，その内側は複雑な差異を含んだ世界である。ストリート・ボーイたちはヌゥシによる分節化をおこない，ストリートの状況を差異の体系として把握してゆく。彼らは自分たちを言語により分節化し，複数のカテゴリーに分類しているのである。筆者はアビジャンにおけるストリートのカテゴリーについて報告した際に，ストリート・ボーイたちによって広く認知されているカテゴリーとして以下の 15 種類を挙げ，その分類原理について考察した（鈴木 1995）[6]。

1 コクサー coxer：長距離バスの客引きという経済活動を営む。
2 バランスール balanceur：アビジャン市内の乗合バスの助手という経済活動を営む。
3 ジョスール・ドゥ・ナマ djosseur de naman：自動車見張りという経済活動を営む。
4 ブッカマン・ドゥ・ジョロコ gboukaman de jôlôkô：ネックレス泥棒という犯罪行為をおこなう。
5 デバルセ débalousseur：スリという犯罪行為をおこなう。
6 グボグボマン gbongbonman：ピストル強盗という犯罪行為をおこなう。
7 グラウ graou：押しこみ強盗という犯罪行為をおこなう。
8 ディーラー dealer：麻薬密売という犯罪行為をおこなう。
9 シェルシュール chercheur：非犯罪的な経済活動を営む。chercheur はフランス語で「探す人」を意味するが，犯罪行為を避けて糊口をしのぐ道を探す人，という意味。
10 ヌゥシ nouchi：映画館にたむろし，身なりが汚く，暴力的犯罪行為をおこなう。
11 ヴォゴ vôgô：非暴力的犯罪行為をおこなう。人の裏をかく知能犯的存在。
12 ルバ loubard：筋肉を発達させ，清潔な身なりをした肉体派。フランス語の loubard「ならず者」を語源とする。
13 ラスタ rasta：ジャマイカのラスタのライフ・スタイルを模倣する。
14 ヴァスコ vasco：凶暴な性格を持つ。
15 バコロマン bakôrôman：屋外で寝る路上生活者。

ストリートにおいて，個人とカテゴリーが 1 対 1 対応を示すとはかぎらず，しばしば 1 人の人間が複数のカテゴリーに属す。あるルバが麻薬を売っていれば，彼はディーラーでもある。あるヴォゴが凶暴で，スリの常習犯であれば，彼はヴァスコでもあり，

デバルセでもある。これはストリートにおける分類原理がひとつではなく複数存在していることを示している。1 個人の異なる側面が，それぞれ異なる分類原理にあてはめられるのだ。

上記のカテゴリーのうち，1〜8 は経済活動の形式による分類である。そのうち 4〜8 は犯罪行為であるが，「金を稼ぐ」という意味において経済活動の一種である。ここではあくまでも経済活動の形式が分類原理として働いており，その犯罪性はあくまでも二義的な要素である。

一方，経済活動に関連しながら，その犯罪性で分類される一群のカテゴリーが存在する。9 は靴磨き，新聞・雑誌売りのほか，1〜3 をも含みうるが，その属性は非犯罪性である。反対に 10 および 11 の経済活動は犯罪性により特徴づけられる。さらに 10 は暴力性，11 は非暴力性を属性とする（経験的にはこの区別はかなり曖昧であるが，両者を区別する際にはこの基準での差異化がおこなわれることが多い）。つまりここでは，経済活動の性質が分類原理となっているのだ。であるからこの種のカテゴリーは，たとえば 9 が 1，2，3 を含むように，犯罪性／非犯罪性を持つ異なる形式の経済活動カテゴリーを内包することができるのである。

ルバとラスタは，そのスタイルを分類原理としている[7]。ルバは空手映画に大きな影響を受け，正式に，あるいは自己流に空手をはじめとする武道を習得し，筋肉を発達させ，それを誇示し，喧嘩することを好む。独自の身体動作を身につけ，その身ぶり手ぶりや歩き方でルバであることは一目瞭然となる。また身だしなみにも気を遣い，つねに清潔であることを心がけ，ジーンズ，スニーカー，野球帽など，アメリカ風の若者スタイルの服装で身を固める。経済活動は，その肉体的力を生かして，警備員，用心棒などに従事するが，肉体的力を背景に恐喝を働くこともある。経済活動はこのカテゴリーの派生的な部分で，中心となるのはその身体的特徴（筋肉，身体動作，清潔な身なり）と，肉体的力に裏打ちされた攻撃的なメンタリティである。ルバにおいては，筋肉質の肉体を中心に形成されたトータルなスタイルが分類原理として働いている。

ラスタはジャマイカのレゲエに大きな影響を受け，レゲエの担い手であったラスタのスタイルを模倣する。かならずしもジャマイカで誕生した政治・宗教的なラスタファリ運動を理解しているわけではなく（もちろん，理解している者もいるが），ドレッドロックスという髪型や，赤・黄・緑のラスタカラーをあしらった服装・アクセサリーなどによってラスタの外観を装い，レゲエを愛好し，しばしば大麻を吸飲する。特定の経済活動に結びつけられるわけではないが，レゲエの歌手や演奏家をめざす者は多い。

ヴァスコは経済活動も外見も問題とはならず，その凶暴性が分類原理となる。その使用法は多様で，たとえば特定の個人を凶暴であると評価してヴァスコにカテゴライズする場合もあれば，特定の個人のとった特定の行為に凶暴性を見いだして，その時点において彼をヴァスコであると評価する場合もある。

バコロマンの基準は屋外で寝るか／寝ないか，という状態だけである。アビジャンのストリート・ボーイは自宅や友人宅などで眠る者がほとんどで，路上生活者は「汚い」として差別されることが多い。

このように，ストリートの分類原理には，①経済活動の形式，②経済活動の性質，③スタイル，④性質（凶暴性），⑤状態（屋外で眠る），の5つが挙げられる。これらはストリートの生活における主要なテーマの直接的な表れである。「いかにして金を稼ぐか」（①，②），「どのように自己を呈示するか」（③），「いかにして生き残るか（凶暴性に裏打ちされた暴力によりストリートで生き残る）」（④），「宿の確保」（⑤），これらのテーマを巡ってストリートの生活が展開している。この主要テーマが5つの分類原理を生みだし，15のカテゴリーを形成していったと考えられる。こうしてストリートの人間関係は分節化され，個人は特定のカテゴリーに分類されることで，複数のカテゴリーの織りなすストリートの全体社会の中に位置づけられるのである。

外側から一括してカテゴライズされたストリート・ボーイたちは，内側では自分たちを複数のカテゴリーに分節化しており，ストリート・ボーイ全体を指す自称は存在しない[8]。だがそこにストリート・ボーイとしての共通のアイデンティティが存在しないわけではない。何よりも彼らはたがいに似かよった社会経済的状況に身をおき，さらにヌゥシという共通言語を喋るのである。カテゴリーの種類にかかわらず，彼らはbras droit（フランス語で「右腕」），あるいはfrère de sang（フランス語で「血の兄弟」）という呼称で呼びあうことが多い。それぞれフランス語の語彙であるが，ヌゥシに取りいれられることによって，「ストリートにおける親友」という意味を付与されている。ami, camarade, copainなど「友人」を意味する他のフランス語の語彙ではなく，bras droit, frère de sangという呼称を選択的に使用することで，ストリートという閉じたコミュニケーション空間を共有する者同士が結びつく。このようにヌゥシは，ストリート世界を分節すると同時に接合しているのである。

4　空間認識――ここは何処？

ヌゥシはストリート・ボーイを分類するだけでなく，彼らの居住空間も分節化し，そこに独自の序列をつくりだしている。その際に重要となるのは，名づけという行為である。

アビジャンの街区名は行政が定めた公的なものである。行政上，アビジャンはville（ville d'Abidjan）と位置づけられ，それを構成する10の市はcommune（commune de Cocodyなど）と呼ばれる。フランス語でvilleは規模の大きな都市を，communeは最小行政単位を指すが，日本語ではどちらも「市」と訳される。これらに対し，ヌゥシでは以下のような名づけがおこなわれている（公的名称→ヌゥシによる名称）[9]。

アビジャン Abidjan → アバジャム Abadjam

〈10 の市 commune〉

アボボ Abobo → アボブソン Abobson

アジャメ Adjamé → アジャムソ Adjamousso

アッテクベ Attécoubé → アテクソン Atécson

ココディ Cocody → コクソン Cocson

クマシ Koumassi → クム Koumou，クムシティ Koum-city

マルコリィ Marcory → マルコス Marcos

プラトー Plateau → プラ Pla，プラヤ Playa

ポール・ブエ Port-Bouët → ？

トレッシヴィル Treichville → トレッシ Treich，トレッシタウン Treich-town

ヨープーゴン Yopougon → ヨップ Yop，ヨップシティ Yop-city

ヌゥシの会話において公的な名称も使用されるが，上記のようなヌゥシ独自の名称が広範囲に使用されている。このように名づけという行為によって，ストリート・ボーイたちは自分たちと居住空間との関係性を象徴的に転換させているのである。公的な名称はたんに物理的空間を意味するだけでなく，そこを政治的に支配する権力の存在を暗示する。世間からの偏見だけでなく，治安維持の名目で警察の取り締まりの対象となりやすいストリート・ボーイたちは，独自の命名によってこのコノテーションを払拭し，その場所を自分たちの生活のフィールドへと転換させるのである。そこはもはや国家の官僚組織に組みこまれた行政単位ではなく[10]，自分たちの主体性が刻印された居住空間となる。こうしたヌゥシによる名づけは市（ville, commune）のレベルだけでなく，その下の街区（quartier）のレベルにおいても数多くおこなわれている。

ストリート・ボーイによる主体的な空間把握は，「ゲットー」という概念の導入によってより明確となる。ゲットーとはもともと都市の中に形成されたユダヤ人居住区を指していたが，現在では政治的に権力を持たない者，社会的に差別された者が集住する差別的居住地区を意味する。この語はフランス語の語彙に含まれるが，レゲエの流行によってアビジャンのストリート・ボーイのあいだに普及し，彼らの視点からあたらしい意味を持つようになった。

レゲエはジャマイカで誕生した政治・宗教的メシアニズムであるラスタファリ運動の思想を背景に，首都キングストンに散在するゲットー（低所得者居住地域）の若者を中心として形成された音楽である。彼らは奴隷貿易・植民地主義の延長線上に形成された西洋文明および資本主義社会をバビロン・システムと呼んで激しく糾弾するとともに，父なる祖国・母なる大地であるアフリカを賛美し，エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝を救世主として崇拝した。こうしたメッセージをレゲエにのせて歌ったシンガーたちのほとんどはゲットーの出身であったため，レゲエは聴取者に対し，ゲットーを起点とし

て世界システムを批判的に把握するという視点を提供することとなった。

レゲエは1970年代後半からアビジャンに普及しはじめ，やがてコート・ジヴォワール人のレゲエ・シンガーが数多く誕生することで，1980年代から1990年代にかけて若者にもっとも人気のあるポピュラー音楽となっていった。その過程でラスタのスタイルがストリート・ボーイたちに取りいれられていったのであるが，注意すべきはレゲエを通してラスタファリ運動の要素が受け入れられる際に，それはアビジャンの社会的文脈に沿って変化していったということである。ヘブディジは1970年代にイギリスにおいてジャマイカ移民2世のあいだにラスタのスタイルが流行した現象について，「それはラスタの人達の美学の変型であり，レゲエの輸入アルバムのスリーブから借りて，移民2世達の要求に合うように変化させたものだった」（ヘブディジ 1986: 67）と分析しているが，まさに同じことが同じ時期にアビジャンで起きていたのである。

まず，ラスタファリ運動の中心思想であるハイレ・セラシエ崇拝は，ごく一部の熱狂的な模倣者以外にはまったく受けいれられなかった[11]。むしろ，身体装飾や行動様式などラスタのサブカルチャーが普及したことの方が社会的インパクトは大きく，第3章で指摘したようにストリートにラスタというカテゴリーがつくりだされた。このように可視的な要素と並行して，思想という不可視なレベルでの変化が引きおこされていったが，それを象徴するのが「ゲットー」という呼称の普及である。

ゲットーという語が定着する過程で，それはアビジャンの社会的文脈にあわせて複数の意味を担っていった。第一義的に，ゲットーはアビジャンに散在するスラム街を意味する。これは，フランス語のghettoという語の意味とも一致する標準的な用法である。だがレゲエを通して，ゲットーは主体的に把握した自己の居住空間という意味を付与され，主体性の空間的起点としてストリート・ボーイたちに理解されるようになっていった。ここからゲットーという呼称のミクロ的およびマクロ的なふたつの使用法が生まれた。ミクロ的には，たとえスラム街でなくとも，「ねぐら」という意味で自分の家やその周辺，あるいは人目に触れない溜まり場などをゲットーと呼ぶようになった。マクロ的には，アビジャンを構成する10の市を富／貧に二分し，官庁街であるプラトーおよび中・高級住宅街であるココディを前者，自分たちの多くが住むそれ以外のすべてを後者に分類し，後者をゲットーと呼ぶようになったのである。こうなると，10市の内の8市がゲットーとなり，人口，居住面積ともに多数派となってしまうが，政治権力，経済力のバランスが中産階級以上の層に偏っているという認識のもと，ストリート・ボーイたちは社会的マイノリティとしての自覚を持って自分たちの居住する地区をゲットーと呼ぶのである[12]。このようにゲットーという語は，ストリート・ボーイの居住空間だけでなく，彼らの主体性をも表象するようになった。ストリート・ボーイたちはアビジャンを金持ち地区とゲットーに分節し，ジャマイカのラスタに倣って前者を不平等な政治・経済システムの象徴として批判的に理解するのである[13]。

最後にストリートとゲットーの関係について整理しておこう。フランス語で物理的空間としての「道路，通り」を意味する語は複数あり，アビジャンの道路はその規模と形態によって行政側から公的な命名がおこなわれている[14]。だが，これはストリート・ボーイに限ることではないが，アビジャンで生活空間というニュアンスでストリートを表現する場合は rue を用いることが多く，またストリート・ボーイに相当するフランス語は enfant de la rue で，この場合も rue が用いられている。ヌゥシでストリートを一括する名称はなく，やはり rue が使用される。これだけ明確なストリート文化が発達しているアビジャンで，「ストリート」を意味するヌゥシの語が存在しないのは意外であるが，ストリート・ボーイ出身のレゲエ・シンガーであるワビー・スパイダーが〈Erreur de gawa〉の中で「俺はゲットーで生まれた Je suis né dans le ghetto／俺はストリートで生まれた Je suis né dans la rue」と歌っているように，ストリート・ボーイにとってゲットーとストリートはともに自身の帰属する空間として認識されている。ゲットーは基本的に居住空間として固定されるために静的なニュアンスを持つが，ストリートはダイナミックな経済活動の場であり，金持ち地区／ゲットーの境界を突きぬけてアビジャン中に広がるフィールドである。どちらにも共通しているのは，それがストリート・ボーイたちが主体的に捉えた社会的空間であり，彼らにとって自己のおかれた社会的状況を解釈するための起点となっているということである。

5 ストリートの価値世界——イェレとガワ

アビジャンにおいて，ストリートの状況はヌゥシによる言語表現によって可知的な形式を与えられ，ストリート・ボーイにとって解釈可能な形態となる。ではこの形式に，何らかの秩序が，一貫性があるのだろうか。

ヌゥシに「イェレ yéré」と「ガワ gawa」（あるいはガウー gaou）という語彙がある。単純に訳すと，イェレは「頭がいい（形容詞）」「頭がいい人（名詞）」，ガワは「頭の悪い（形容詞）」「頭の悪い人（名詞）」となる。では，ストリートにおいて「頭がいい／悪い」とはどういうことであろう。

ストリート・ボーイによるガワの説明としてよく耳にするのは，「田舎者」「新参者」「何も知らない奴」などである。田舎者は，実際に村に住む者というより，ストリートとの社会的距離が大きい者に対する隠喩的表現である。新参者は，ストリート世界にコミットした時間がまだ短い者という意味である。何も知らない奴とは，ストリートの文化や約束事を知らない者のことである。いずれも，ストリートにおける社会的・文化的コードに対する無知を，距離的，時間的，直接的に表現している。反対にイェレは，ストリートにおけるさまざまなコードを理解し，それらを活用する能力のある者のことである。

ヌゥシに「マニエラージュ maniérage（名詞）」という語彙がある。これはストリートにおいて，賢く立ちまわって自分に有利な状況をつくりだす行為を意味する。この動詞型は「マニェレ maniérer」となるが，その語源はフランス語の動詞 manier「（言葉，論理などを）使いこなす，（人，動物などを）思いどおりに動かす」であると思われる。ストリートでコード化された言語活動および身体活動を正しく理解し，それらを適切なコンテクストのもとで活用するという行為がマニエラージュである。言うなれば，「ストリート・リテラシー」に沿った行為がマニエラージュであり，ストリート・リテラシーを修得した者がイェレなのである。このストリート・リテラシーこそ，イェレとガワを分ける参照点となっているのだ。

ここでストリート・リテラシーという用語を使用したのは，ストリートには読みこまれるべき規範がある，ということを含意している。規範という言葉が強すぎるのなら，約束事と言い換えてもいい。この規範，約束事こそ，ストリートのラングと言ってもいいだろう。ストリート世界は流動的で，そこで生起する現象は一見とらえどころがないように見える。だが，「この異質なものの混和した総体から，純然たる社会的対象，コミュニケーションに必要な約束事の体系化された総体」を取りだしたものがラングである（バルト 1971: 98–99）。ストリート・ボーイによるコミュニケーション実践の積み重ねがいつのまにか価値の体系をつくりだし，ストリートの新参者はそれを内面化することでストリート・ボーイとなってゆく。マニエラージュとは，このストリートのラングにもとづく個別的な現動化の行為，つまりパロールの一形態にほかならない。

「ラングは，パロールからスタートしてはじめて可能になる」（バルト 1971: 102）。つまり，まずはストリート・ボーイたちによる状況に合わせた個別的なコミュニケーション行為が蓄積され，やがてそこから一定の価値の体系が生成する。そして「人がパロールを運用できるのは，それをラングの中から取りだしてこられる場合だけである」（バルト 1971: 102）。つまり，一旦ストリートのラングが生成されると，ストリート・ボーイたちはそこに示された規範を参照しながら，具体的な行為を展開してゆくのである。

ただしストリートのように極度に動態的な社会的空間においては，ラングとパロールのあいだの相互作用が活発化するであろう。つまり，言語のレベルにおいても身体行為のレベルにおいても，新しい情報や人的資源によってもたらされるあらたなるパロールに影響されながら，ラングが組み換えられてゆく，という現象が常に生起するだろう。こんな流動的なものはラングではない，という批判は当然あり得るが，このような「暫定的」ともいうべきラングにしたがって個別的なパロールを現動化させるという象徴的レベルにおける不安定な状況が，さまざまな経済活動に従事する際の物理的な活動と相俟って，アビジャンにおけるストリートのダイナミズムをつくりだしているとも考えられよう。

現在，「ガワ」という語はストリートを越境してムサ・フランス語に取りいれられて

いるが，そこではストリートのラングとの関係性の評価に使われるのではなく，たんに「間抜け，田舎者」という意味で日常的に使用されている。

6　意味生産の方法――ブリコラージュ

アビジャンのストリート文化は，偶然の積み重ねによる産物などではない。その生成の過程にはある種の知的欲求が存在し，それにしたがってストリート・ボーイたちは象徴的操作をおこなっているのである。レヴィ＝ストロースが「世界は，欲求充足の手段であるとともに，少なくともそれと同じ程度に，思考の対象なのである」（レヴィ＝ストロース 1976: 3）と述べているとおり，ストリートはたんに経済的フィールドであるだけでなく，象徴的フィールドでもあるのだ。

個々のストリート・ボーイの経験は個別的であるが，アビジャンという都市空間において類似した社会経済的状況におかれた少年たちの経験もまた類似しており，その類似性をもとに類型的な言語カテゴリーが形成される。その例として，これまでストリートの人間分類および空間への名づけについて見てきた。こうして形成された言語カテゴリーは，今度はストリート・ボーイたちが自己のおかれた具体的な状況を解釈する枠組みを与え，彼らの思考の参照点となる。つまり，個別的な状況が類型的な言語表現によって把握されてゆくのである。やがてヌゥシを準拠枠にしたストリートの価値体系（ラング）が生まれ，それを参照しながらストリート・ボーイたちは個別的な言動（パロール）を繰りひろげてゆく。

アビジャンのストリートにおいて，こうした一連の象徴的作業が「高密度」で展開しているのであるが，その理由はストリート・ボーイたちが学校および家庭双方の領域から排除されていることと関係している。学校と家庭は，それぞれ「近代」と「伝統」につながる言説を内部に持ち，人々はそこでパターン化した思考法を内面化し，現実を解釈する術を身につけてゆく。そこでは象徴的エネルギーの流れ道がすでに用意されており，人は基本的にそれに従えばいいことになっている。いっぽうストリート・ボーイたちはそのどちらからも弾きだされ，従うべき準拠枠を十分なかたちで内面化することができていない。それでも彼らは社会的存在として生活してゆかねばならないし，知的欲求を備えた人間として象徴的エネルギーを流す通路を見いださねばならない。こうした社会的状況の中で彼らが「自主制作」したのがストリート文化なのである[15]。ではこの自主制作はどうやっておこなわれるのか。その方法を説明してくれる概念が「ブリコラージュ」[16] である。

アビジャンのストリート文化は，言語レベルおよび身体レベルにおけるさまざまな記号で構成されている。1970 年代以降のアビジャンのストリートという限られた時空間の中で，ストリート・ボーイたちは手に入れることができる雑多な材料を組みあわせて

ストリート文化をつくってきた。その際にもっとも大きな記号の供給源となったのはマスメディアからの情報，とくに映画，テレビ，ラジオから流される視聴覚に訴えるメディア情報であった[17]。なかでも空手映画，レゲエ，ラップという，それぞれアジア，ジャマイカ，アメリカから発信された文化は，ストリートに「有用」なさまざまな記号で満たされていた。そこでストリート・ボーイたちはこれらの記号を自分たちの言語・身体表現の中に取りいれてゆくのであるが，その際に自分たちのおかれた社会的コンテクストにあわせて記号の組み換えをおこなう，つまりある記号表現（能記）を別の記号内容（所記）と結びつけ，あたらしい意味体系をつくっていったのである。

たとえば，空手の所作はストリートにおける肉体的力を誇示する身体動作としてルバのスタイルに取りいれられ，ストリートのカテゴリー間の差異を示す弁別項目として作用する。同じくラスタの外観的特徴も，独自のカテゴリーを形成する示差的特徴となって，他のカテゴリーとの差異化を示すプロセスに参加する。このように，「マスコミは，社会を分類するのにいちばん手軽な分類名を提供してくれる」のであり，「新聞や雑誌，テレビ，映画などを通して，経験は組織化され，説明され，いわば矛盾の中で矛盾しないようにつくられる」（ヘブディジ 1986: 122）。マスメディアから寄せ集められたさまざまな記号は，ストリート・ボーイたちの手の中であらたに配列しなおされ，組みあわされ，ストリートにおける意味を生産してゆく。こうして，空手映画，ハリウッドのアクション映画（ランボー，ターミネーターなど），レゲエ（ジャマイカのラスタ），ラップ（ヒップホップ文化）などから視覚的・聴覚的に感知されるさまざまな記号は，アビジャンのストリートにおいてあらたな場所に配置され，首尾一貫したストリート〈内〉世界を構成してゆくのである。アビジャンのストリートにおける意味の地図は，このように作成されてゆく。

ただここで注意しなければならないのは，ブリコラージュという「具体性の科学」によって，ストリートという閉じたコミュニケーション空間における意味体系が構成されてゆくのと同時に，逆説的な言い方になるが，メディア情報によってストリート世界が外に開かれてゆくということである。アビジャンのテレビや映画に登場する空手家，ラスタ，ラッパーなどはマスメディアを通した情報の集積としてのイメージであり，だからこそそのイメージを構成する諸記号を取りだして，ブリコラージュの素材とすることができた。ここで，マスメディアに映ったイメージそのものがすでに持っている現実とのズレ，さらに，ストリートにおけるブリコラージュのプロセスの中で生みだされた意味と現実とのズレ，という二重のズレが生じることになるが，そうした「現実」とのズレを内包しながらも，ストリートの意味世界はアジアと，ジャマイカと，アメリカと象徴的に結びつくのである。こうしてストリート内存在であるストリート・ボーイたちは，ストリート文化の実践を通して，より広い世界と結びついた世界内存在としての生を生きているのである。

注

1) 筆者がアビジャンに滞在したのは，① 1989 年 4 月～1991 年 3 月，② 1992 年 5 月～1994 年 8 月，③ 1995 年～1998 年（各年 1～2 ヶ月間）である。①は日本大使館の専門調査員として赴任し，勤務の傍らフィールドワークをおこなっていたので，予備調査と捉えたい。②は講談社野間アジア・アフリカ奨学金を得ておこなった本格的なフィールドワークである。③は大学の春・夏休みを利用しての補足調査である。その後，ギニアのグリオについて研究にテーマを移行したが，2006 年よりふたたびアビジャンでの調査を開始した。
2) ヌゥシの文法的考察については，鈴木（2009（予定））参照。
3) 学術出版物においては，「スラング」に argot が使用されることが多い。例として，Calve（1994），Colin & Mével（1990），N'Gessan（1990）などがある。
4) 多くのストリート・ボーイが筆者に語ってくれた家庭内における「居心地の悪さ」は，家族から自己に向けられた「ソフト」な拒絶を表現したものと考えられる。
5) ストリートのスラングは，フランス語，英語，民族語，その他（日本語の空手用語も含まれる）から語彙を借用することが多く，ジュラ語，ベテ語，バウレ語など話者人口の大きい民族語起源の語彙は多数使用されている。ストリートは多民族的環境で，第一言語はヌゥシであるが，同一民族出身者がヌゥシと併用しながら民族語で会話することもある。筆者の調査時にはあまり観察されなかったが，ストリート文化創成期の 1970 年代において，その頻度は高かったであろう。そうした環境のもと，ジュラ同士の会話から〈ヌゥシ〉という呼称が生まれ，それが普及していったと考えられる。
6) ストリートのカテゴリーは状況の変化に伴って常に生成・変化する動態的なものであるので，ここに挙げるカテゴリーはあくまでも筆者の調査時に観察されたものである。なお列挙されるカテゴリーの順序，分類原理の整理の仕方が，鈴木 1995 のそれと異なるが，全体の論旨により的確に対応させるための措置である。カテゴリーの外国語表記はすべてフランス語表記となっているが，それはヌゥシがフランス語の語尾（-eur「～する人」など）を使用しているためである。
7) ここでの「スタイル」とは，ヘブディジのサブカルチャー研究でのそれとおなじ意味で使用されている（ヘブディジ 1986）。
8) 彼らが研究者，ジャーナリスト，NGO 関係者などに対して，フランス語でストリート・ボーイを意味する enfant de la rue によってストリート・ボーイを一般化して語る場合があるが，これはあくまでも特殊な状況における使用例である。
9) ヌゥシは話し言葉なので基本的に文字化されることがない。ヌゥシにより命名された名称は筆者がフランス語表記にしたがって（一部，英語表記で）表記したものである。なお，ポール・ブエについてヌゥシによる名称を把握していないのは筆者の調査上の失敗であるが，数年にわたる調査の過程でそれを耳にしたことがないということは，ポール・ブエがアビジャンの南東のはずれにあり，トレッシヴィルやヨープーゴンのような繁華街，アジャメやアボボのような人口密集地域と比べてストリート文化の中であまり目立たない存在であることに関連しているのかもしれない。
10) ヌゥシによる名づけの際に，英語（-city, -town）が使用されているのは興味深い。これは映画やポピュラー音楽を介してのアメリカやジャマイカからの影響であるが，フランス語で体系づけられた公的な政治システムへの一種のアンチテーゼとなっている。他にも街区以下のレベルにおいて，英語（-city, -town）を使用した，あるいはアメリカ，ジャマイカ起源の地名・人名に由来する名づけ（Washington, Dallas, Kennedy, Montego-Bay, Marley など）は多い。
11) アビジャン・レゲエの宗教性については，むしろアビジャン・レゲエの創始者であるアル

ファ・ブロンディの示した，「神はひとつである」としてすべての宗教を肯定する態度の方が大きな影響を及ぼしたといえる。鈴木 2006a 参照。

12) 実際にはこの二分法は多分にイデオロギー的なもので，前者にも低所得者が居住する地区があり，後者にも金持ちが住んでいるが，それらを例外と考えるに十分なほど富と権力（多くの政治家はココディに住む）が偏在しているのは明らかである。

13) この際，レゲエに深くコミットしている者は，ジャマイカのラスタに倣って前者を「バビロン」と呼ぶが，それ以外のストリート・ボーイのあいだにこの言い方はそれほど普及していない。

14) *Guide Plan: Ville et communes Abidjan* 1988 のリストにはアビジャン市内の通りが 276 個記載されているが（ここに記載されていない通りも存在する），その内訳は boulevard が 38 個，avenue が 47 個，rue が 181 個，allée が 2 個，impasse が 7 個，autoroute が 1 個であった。

15) これはあくまでもアビジャンのストリート・ボーイを取りまく社会的状況を述べたものである。学校教育を受けた若者がロックやレゲエとの関わりでサブ・カルチャーを形成したり，学校教育課程にある日本の女子高生が独自のサブカルチャーをつくりだすといったように，サブカルチャーと学校教育との関係はさまざまである。

16) これはもちろん，レヴィ＝ストロースが『野生の思考』の中でフランス語の bricolage「器用仕事」から転用した用語であるが（レヴィ＝ストロース 1976: 22），その後はカルチュラル・スタディーズの分野にも取りいれられ，サブカルチャー研究などに応用されている（ヘブディジ 1986: 146–151）。

17) アビジャンにおけるマスメディアの発達状況については，鈴木（2000）の第 7 章参照。

文　献

バレット，L. E.

1996 『ラスタファリアンズ――レゲエを生んだ思想』山田裕康訳，平凡社。

バルト，R.

1971 『零度のエクリチュール』みすず書房。

Calvet, L.-J.

1994 *Quesais-je? 700: L'argot.* Paris: Presses Universitaire de France.

Colin, J.-P. and J.-P. Mével (eds.)

1990 *Dictionnaire de l'argot*. Paris: Larousse.

ホール，S.／P. D. ゲイ編

2001 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』宇波彰監訳，大村書店。

原口武彦

1996 『部族と国家――その意味とコートジボワールの現実』アジア経済研究所。

ヘブディジ，D.

1986 『サブカルチャー――スタイルの意味するもの』山口淑子訳，未來社。

リー，H.

1992 『アフリカン・ロッカーズ――ワールド・ビート・ドキュメント』鈴木ひろゆき訳，JICC 出版。

2003 『ルーツ・オヴ・レゲエ――最初のラスタ レナード・ハウエルの生涯』鈴木ひろゆき訳，音楽之友社。

レヴィ＝ストロース，C.
1972 『構造人類学』荒川幾男他訳，みすず書房。
1976 『野生の思考』大橋保夫訳，みすず書房。
三浦信孝・糟谷啓介編
2000 『言語帝国主義とは何か』藤原書店。
N'Gessan, J. K.
1990 Le nouchi abidjanais, naissance d'un argot ou mode linguistique passagère? *Des langues et des villes*. Paris: Didier Erudition.
Salmon-Marchat, Léa
2004 *Les enfants de la rue à Abidjan*. Paris: L'Harmattan.
鈴木裕之
1992 「アフリカにおける都市文化創造のプロセス――コート・ジヴォワール共和国アビジャンの〈ヌゥシ〉の事例から」『アフリカ研究』40: 79–89。
1995 「アビジャンの若者文化におけるカテゴリー――現代アフリカの都市文化コード解読のための一考察」『民族学研究』59 (4): 441–453。
1996 「コミュニケーション様式の創造過程としての都市化――アビジャン・レゲエとストリート文化」『アフリカ研究』48: 1–18。
2000 『ストリートの歌――現代アフリカの若者文化』世界思想社。
2001a「新しいモードの出現――アビジャン・レゲエの示す超民族性」和田正平編『現代アフリカの民族関係』pp. 310–326，明石書店。
2001b「ストリートは文化の揺り籠――アビジャンにおけるストリート文化の生成」嶋田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市的世界』pp. 194–216，京都：世界思想社。
2005a「マス・コミュニケーション過程に侵入するストリート文化――アビジャン・レゲエはいかに誕生したか？」『三田社会学会』10: 29–45。
2005b「アフリカで生成する新しい都市音楽」『神奈川大学評論』51: 62–68。
2005c「政治を映すレゲエ――アルファ・ブロンディはいかに政治を歌ったか」『アフリカ・レポート』51: 38–42，東京：アジア経済研究所。
2006a「神を歌うアルファ・ブロンディ――アフリカ都市音楽に表現される宗教観」和崎春日編『現代アフリカ社会における宗教的救済の都市人類学的研究』pp. 25–55，名古屋大学文学研究科。
2006b「アビジャン・レゲエと政治の関係――アルファ・ブロンディの歌詞に表現される政治的視点の変化」『社会人類学年報』32: 25–56，東京都立大学社会人類学会。
2009（予定）「コート・ジヴォワール，アビジャンの都市言語――ストリートで生成するスラング」梶茂樹・砂野幸稔編『アフリカにおけることばと社会』三元社。
Suzuki, H.
1997 Loubard Feeling:Quand le reggae se marie avec la culture de la rue. *Cultures Sonores d'Afrique*, pp. 309–347（文部省科学研究費海外学術調査報告書『アフリカにおける「音文化」の比較研究』，研究代表者・編者　川田順造，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）。
2001 Rapper, danser et se vendre bien:la commercialisation de la culture de la rue à Abidjan. *Cultures Sonores d'Afrique II: Aspects dynamiques*, pp. 97–125（文部省科学研究費海外学術調査報告書『動態としてのアフリカ「音文化」の研究』，研究代表者・編者　川田順造・塚田健一，広島市立大学）。

トムリンソン，J.
1997 『文化帝国主義』片岡信訳，青土社。
ターナー，G.
1999 『カルチュラル・スタディーズ入門――理論と英国での発展』溝上由紀他訳，作品社。